

Title	「祈り」と共にあるホスピスの風景
Author(s)	丸山, 久美子
Citation	聖学院大学論叢,18(2) : 265-276
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=114
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

「祈り」と共にあるホスピスの風景

スピリチュアル・ヒーリングに関する文献的研究

丸 山 久美子

Remarks on “Prayer” in Hospices
A Study of spiritual Healing from the Literature

Kumiko MARUYAMA

In a hospice, terminal care necessitates spiritual healing by a special healer, a spiritual pain therapist who is not a pastor, a priest or other religious leader. The purpose of this study is to review the history of spiritual healers in the literature and to consider what spiritual healers and prayer for terminal medical patients (such as those suffering from cancer or other illness) are and examine various aspects of new scientific considerations based on the theories C.G.Jung (psychoanalysis), such as concepts of synchronicity and acausality, especially in modern societies in conflict, as clearly as possible.

Key words: Synchronicity, Acausality, Spiritual Pain, Spiritual Healer, Transcendental Meditation, Hyperspace

はじめに

余命3ヵ月と宣告された終末期の患者が終わりの時まで、静かにどんな先端医療の恩恵をも受けず、つまりは延命操作を望まず、自然死を待つ患者を受け入れる病院をホスピス、または緩和病棟という。なかには3ヵ月経て奇跡的に自然治癒力で退院する患者も居る。それはガン細胞がストレスから異常に発生するので、人間が本来持っている自然治癒力が疎外され、ストレスから解放される時に自然にガン細胞が退縮して消滅してしまうからである。ガン性体質は神経質であり他者との交わりが円滑に行かない遺伝的体質を兼ね備え、他の人よりストレスに曝されやすい。しかも、彼らはホスピスに入院することを好まず、先端医療の恩恵を求め、あらゆるガン治療を受けるが、そ

「祈り」と共にあるホスピスの風景

の都度ストレスにかかっているために、ガン細胞の増殖を食い止めることができない。諮らずも、今日の世界は情報多元時代であり、疾病対策はさまざまな媒体から知識として吸収することができる。店頭には夥しいガン疾病対策の方法やガン患者のガンを抱えて共存する生活の有り様、がん征服記などの体験談が山積みされている。これまで完治しない病気でも医療の急速な発展の故に完治する事が多いが、病気もまたそれなりに進展するので、いたちごっこの様相を呈している。病気見舞いに来る多くの人は患者が完治することを「祈る」と言い残して病室を去る。キリスト教系の病院にはチャペルがあり、望めばチャプレンが患者の側で祈る。それによって患者の心に余裕ができれば、それで平安のうちに召される事になるだろう。

このようなホスピスの伝統は欧米諸国においては至極当たり前の所作である。キリスト者であれば誰でもこのような死への準備を諄々に行う。

今日、投薬の副作用や手術の痛みだけでなく、スピリチュアルな痛みが問題になっている。どのような沈痛薬でも収まらない痛みの苦しみの原因をスピリチュアル・ペインといい、この問題について積極的に研究する姿勢が整ってきた。

このスピリチュアリティの実践的行為が「祈る」という行為である。あらゆる俗なる環境から隔離されたところで「祈る」行為はカトリックの尼僧の一つの役割行動であるが、この行為を病気治療のために活用しようとする実験的研究がアメリカで盛んになった。

以下に述べることは、病める人々への「祈り」の効果が如何なるものかについて、心理学的に考察することである。

1：21世紀の課題としての集合的無意識の研究

ニューサイエンスの視点からすれば、21世紀は東洋的思考が西洋的思考と融合する世紀であることが示唆されている。19世紀の終わりから20世紀のはじめに精神分析学者フロイトによって発見された人間の無意識に関する研究は、今日の社会において様々な変容は見せているものの未だに新しい未知の分野である。フロイトに知見を得たユング⁽¹⁾はフロイトの無意識の概念を新しい視点で捉え直し、東洋的思想にまで拡張した。ユングとキリスト教神学者テイルリッヒの接点はまさに東洋的思想と西洋的思想が微妙なところで合致する極めて興味深いものである。ユングはその後物理学者パウリ⁽²⁾との交流から、共時性（シンクロニシティ）⁽³⁾の考えを開拓し発展させ、自然認識の場において、物理学と心理学が交流する理論的可能性を編み出した。そこで、科学的認識に関する方法論と共に東洋の瞑想体験（カトリックの黙想）の世界観を展開した。ニューサイエンスという言葉は当初はニューエイジ・サイエンスといわれ、若者たちが興味関心を引き起こした所謂「超能力」に関する問題意識から始まった。1960年代に学生運動に熱中した若者達がその後政治離れを起こし、次第に彼らの関心は「精神の世界」に向い始め、若者のカルチャーとなった易経、禅、気、ヨーガ

や影学の瞑想体験から、占いや予言に関する一般の大衆の興味を掻き立て、オカルト・ブームとなった⁽⁴⁾。この種の問題が歪曲されたかたちで新興宗教に流れ、理数系の学生や研究者などが容易に引きこまれた。その結果、オウム真理教の事件が引き起こされたことはよく知られている。ニューサイエンスを信ずる彼らの心のうちに根深く存在している超個人的集合的無意識が、悪辣で珍奇な教祖や暴力団とのからみで、彼らは次第に精神を患って行くようになる。それはさておき、物理学者パウリは物理的自然空間の背景には、感覚だけでは認識できない広い心理的情報空間が広がっているという見解を発表した。パウリのモデルは後に物理学者ボームによって科学方法論にしたがって認識できる自然の状態を明在系 (Explicate Order)、科学の方法論だけでは説明のできない超個人的無意識の場を暗在系 (Implicate Order) と名づけられた。ユング = パウリの共時性モデルも上記のような超個人的な集合的無意識の概念を取り込んで発展させたものであろう。20世紀末になって、欧米諸国を中心に活発に実験が行われている遠隔ヒーリングや祈りの研究などは、このような理論的モデルを実験的観点から実証して行くという意味で重要である。日本では全く考えられないこの種の問題がこのまま等閑に付されることは残念である。無意識の研究や超常現象の研究などは、超能力研究的オカルトであると非難する事例がジャーナリズムを通して多々見られるようになった。それは20世紀後半に「心霊ブーム」をひき起した。青年の社会的態度によると、「魂の死後存続問題」は、今日においても存続しないとするものの比率よりも存続するという比率を上回っている。心霊研究の分野では、死後存続の問題は不明である。⁽⁵⁾しかし、超能力者や霊能者の体験をイカサマであるとする見解は不当である。彼らはそのように体験し一般の人間は体験出来ないだけである。霊能者は一般の人達を説得する科学的方法を持っていない。逆に、我々はそのような霊能者の経験を否定する科学的方法を持たない。死後の問題は学問的には限界であり、理性の立場を取る限り死後の生はあるともないとも言えない。しかしあると確信する人間がないとする人よりも多いということは驚くべきことである。死後の生の問題は信仰の次元に属する事であり、学問的次元ではない。信仰の領域に関する事柄は各人が個々に決定すべき問題であり、学問的方法が決める問題ではないと哲学者達は主張する。その通りであろう。その意味において、現代のスピリチュアリティは学問と信仰の中間にある経験の領域に生じてくる問題である。そこで、我々は現代の世界をその心理的底辺から動かしている新しい時代の思想動向を見ることができよう。

1930年代から超心理学の発展を巡って起こった論争、念写問題で東京大学の助教授であった福来友吉⁽⁶⁾が大学を追われたいきさつは有名である。戦後は1970年代にマスメディアや大衆ジャーナリズムを舞台にした超能力に関する論議が盛んとなった。ここには科学的方法論とは性格の異なる問題が介入している。未知なものを客観的に研究することは、人間の感覚の奥深いところでそれを拒否したくなる心理状態が存在するのではないだろうか。超能力の問題を娯楽番組としてマスメディアが取り上げ続けているうちは、この問題を科学的に取り組みもうとする研究者は疎外されるだろう。超能力研究が示唆する理論的問題点は湯浅泰雄によれば次のように二つの側面がある。

「祈り」と共にあるホスピスの風景

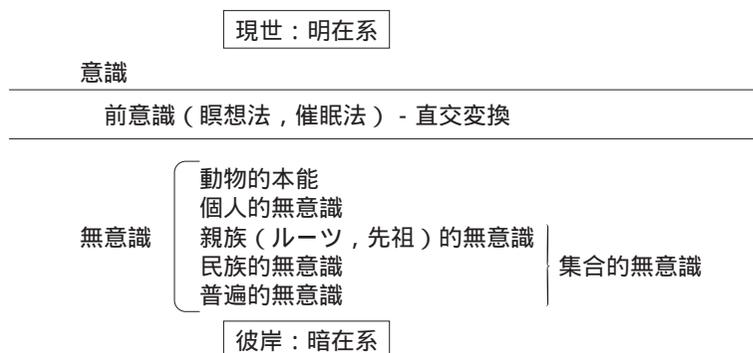
1：身体論の問題として人間の様々な潜在能力について研究する課題。人間の本性に関する研究。
2：ユング＝パウリの共時性モデルやボームの暗在系モデルのような科学的方法による自然認識の前提条件について考える問題。科学方法論の問題。観測問題の解釈を巡って起こった不確定性原理の問題。

観測過程に対する「意識」の介入問題ではユング＝パウリは無意識の領域を含めて考えている。これは極めて難解な問題であるが、人間の無意識の構造の科学的証明が実証されれば可能である。18世紀ルネサンス以来の合理的科学的方法論だけが抜きん出て優れているという観点を覆し、合理的思考のみならず人間の内面を支配する超個人的思考能力は人間だけに与えられた特異なものである。

1980年から90年代において中国医学（漢方）、東洋医学が普及した。「気」のエネルギーの概念を基本とした医学の方法は近代心身二元論を越える新しい人体に関する人間観につながるものであろう。中国人の人体科学は「東洋医学」、「気功医学」、「特異効能（超能力）」を3つの柱にしている。これらは西洋的な超心理学的研究とは異なる方法を取る。中国や日本では「修験道」として、超能力を持つ人材を修行によって養成する。東洋的思想では超能力を宗教、武術、医術などは訓練によって体得する。西洋でも古くは神秘主義的修道院運動の歴史に東洋的な修行の体験が報告されている。1990年以降は医療の場面でスピリチュアリティ論議が盛んに行われるようになった。WHOの健康の定義がきっかけである。日本語ではこれを霊的健康と訳するのは穏当ではないとして、そのままスピリチュアリティ、または霊性と呼ぶ。この霊性問題は21世紀の重要な課題となるであろう。前述のホスピスにおける医療の問題と関連しながら、スピリチュアリティ問題は21世紀の思想的・学問的問題となるであろう。これらの問題はいずれも祈りや瞑想の体験を通して到達できる心理的課題である。心理療法やカウンセリングの課題としても、日本特有の禅の思想を取り入れた「森田療法」⁽⁷⁾を積極的に採用したほうが日本人の心性に照らして有益ではないかと思う。欧米諸国の心理療法や技法、自己実現の方法は様々に存在するが、日本人の心理療法はカトリックの黙想に匹敵する技法として「禅」の技法であり、これは双方共に自分の心の根底にある無意識の中に存在する「真の自己」の探求に該当する。

真の自己としての霊性、スピリチュアリティの発見が21世紀の課題である。

図1 集合的無意識の構造



3 : Q O Lに関するスピリチュアリティ問題

WHOは痛みの側面を(1)身体的痛み,(2)社会的経済的痛み,(3)対人的心理学的痛みの他に,(4)魂(霊)性の痛み(スピリチュアル・ペイン)に分類している。前記の3側面については比較的容易に理解しやすいが,(4)のスピリチュアル・ペインについては必ずしも明確な説明概念は存在しない。WHOQOL / SRPB (2001)によるスピリチュアリティの構成概念は以下である。

医療関連分野でスピリチュアリティが問題になったのは、終末期にある患者の心のケアが重要課題となった1980年代頃である。医療が患者に死に至るまでの日々をいかに苦痛の少ない、自己実現を果たして心穏やかに過ごすことが出来る日々を、どのように提供する事が出来るかを考える風潮が俄かに高まった。しかし、日本におけるスピリチュアリティという概念は多岐に亘り、極めて哲学的で高度な概念規定をもつ。欧米諸国のようにキリスト教的宗教概念と同質のスピリチュアリティとは一線を画している。図2はスピリチュアリティの構成概念であり、図3はその概念構造を示したものである。又、カール・ベッカーはスピリチュアリティを3つの側面に分類している。即ち、1) 靈魂の有り様, 2) 実存的課題, 3) 精神統一の「行」、生命のエネルギーとしての「気」である。

第1の側面である「靈魂」は死後の存続や霊界に対する信仰と関係がある。いずれの葬儀においても死者はあの世への旅立ちが万全に行われるように儀式を執り行う。これは各民族における埋葬

図2 : スピリチュアリティの構成概念 (WHOQOL / SRPS)

第1領域 (対人関係)	1 : 親切, 利己的でない 2 : 周囲の人を受け入れる 3 : 他者を許すこと
第2領域 (生活の規範)	1 : 生活上の規則規範, 秩序 2 : 自由に信念や儀式を行う 3 : 信仰
第3領域 (超越性, 至高体験)	1 : 希望 / 楽観主義 2 : 畏怖の念 3 : 内面の強さ 4 : 自己コントロール 5 : 心の平安, 安寧, 調和 6 : 人生の意味 7 : 絶対的存在との連帯感 8 : 超越的存在との一体感 9 : 諦め / 執着 10 : 死ぬこと, 死に逝くこと 11 : 無償の愛, 人類愛
第4領域 (特定の宗教への信仰)	1 : 宗教心

図3：欧米諸国のスピリチュアリティの概念構造

		探究心のレベル				
		関係概念	共通概念	状況	共通概念	関係概念
統合のレベル (低)	神との葛藤 目標の喪失 信仰喪失 不可知論 不完全性		失望感 絶望感 無価値感	超越的存在への 畏怖, 信仰	希望 存在感 人生の意義	神との関係 超越感覚 至高体験 内的満足感 超越瞑想
	喪失 緊張状態	怒り 不安 罪悪感 孤独・孤立 混乱 疎外感	対人関係, 環境状況 コミュニティ, 家族	目的 平安 信頼 調和 共感 肯定感	慰め・満足・ 喜び・愛・ 赦し 帰属意識 対人関係の調和 愛情の調和	
	空虚・悲哀 無力感・ 恐怖・鬱 自制心喪失	悲観 否定感 不信	生きる意志力 内面的自己統制 自己の存在証明	継続 楽観 安心 英知	落ち着き ユーモア 内面の静寂	
		探究心のレベル				
					統合のレベル (高)	

の儀式において明確に示されている。「無宗教」の人でも、死後の事を気にする事が日本では多く、死んだら終わりという感覚は極めて死を恐ろしいものに変える。死への不安や恐怖を緩和するための役割は第三者がなんらかの他界観を伝えてもうまく行かず、反って頑なに靈魂を拒否して心の安寧が得られない。スピチュアル・カウンセラーの役割はこのような患者の深層に迫り、彼らが最も望んでいる靈魂観を引き出して安心させることであろう。欧米においてはこの種のカウンセリングを「パストラル・カウンセリング」と呼び、神父や牧師の仕事である。患者に魂の救いを与え、医療従事者としての役割を全うすることができれば、患者の死に対する不安や恐怖を和らげる事ができる。キリスト教的ホスピスの施設のほかに日本では浄土系仏教のホスピスが出始めている。

第二の実存的課題は自己実現に至る過程で生ずる人生の意味付けを明確にし、これまでの人生を回顧して自分の生涯における存在理由を理解して感謝する心を得る事が出来れば、自己実現に至る道筋が明確になる。第三の課題は精神統一、または「気」の問題である。森田療法が最も適切である。精神統一して瞑想・感想、念仏題目、祈りや唱和などで精神統一することが末期患者の新陳代謝や呼吸を整える事ができる。良い死に方とは心身の息を整える行が円滑に行われ、静寂のうちに安心して他界する事である。ヨーガ、座禅、瞑想などの心身統一をめざす修行法を実施する事は、西洋医学の限界において東洋医学が活躍する場が与えられると言えるだろう。

今日、医療経費の赤字で財政が逼迫している折、高額な先端医療技術に依存するだけでなく、東洋医学的なスピリチュアル・ヒーリングを重視することが肝要であり、財務省や厚生労働省は医療予算計上に、この現実を認識して大きく関与することが期待される。スピリチュアル・ニーズが高まる

医療現場で、聖職者、臨床心理士、気功師、禅系のカウンセラーの働きが期待される所以である。

3：遠隔ヒーリングにおける「祈り」の効果

近年になってスピリチュアル・ヒーリングや祈りの効果を、実験的に検証する研究がアメリカにおいて盛んになった。「祈りは医療の基本である」という古来からの考え方を実証することを目的とするこれらの研究に精神科医、臨床医が積極的に参加している。遠隔ヒーリングや祈りの研究についてこれまでに判明している研究結果を以下に述べよう。

これらの研究で用いられるのは厳密な二重盲検法といわれるもので、患者を2群に分ける。一方の群には暗示効果を取り払うために患者には何も知らせず、ヒーラーには患者の写真だけを渡して、患者の回復を祈るようにする。ヒーラーは写真だけで患者の様相を知るだけである。他方の群はコントロール・グループである。その際、どの写真がどのヒーラーに渡されたかはわからずランダムイズして行う。実験者や担当医師にもそのことは知らされない。実験結果に被験者、実験者、観察者の心理状態が影響することを排除するためである。全米各地の遠隔地から様々なヒーラーや宗教団体のグループがこの遠隔ヒーリングに参加する。一人の患者に複数のヒーラーがあたり、そのヒーラーのグループはある周期で患者の交換を行う。その結果、ガン、エイズ心臓疾患の患者などに複数のヒーラーが遠隔地から患者に知られずに回復を祈ることのより、患者の心理的指標や免疫状態が改善され、病気の発現や診療回数が減少したという結果を得ている。さらに、遠隔ヒーリングによって、ヘモグロビンの増加、皮膚の炎症、高血圧、喘息、心臓病、白血病、偏頭痛、手術後の痛み等多岐にわたり、統計的な有意差を得た。木戸（2002）によれば、350キロメートル離れている東京 - 仙台間での遠隔気功実験の結果を次のように報告している。この実験において、気の受け手に自分の意志とは無関係な激しい体の動きなどの驚異的な変化が生まれた。さらに受け手の腹部が凹んだり、光のイメージを見たり意識変化が生じた。又、ニューヨーク - 東京間の遠隔ヒーリング実験では受け手の顔の表面温度分布が有意に変化した。このことは遠隔ヒーリングが距離に依存しないことを示唆している。

遠隔ヒーリングの研究において、初期の段階ではヒーラーの活動や医師における生理学的計測などの研究が中心であったが、現在では遠隔作用の問題（非局在）が盛んである。遠隔作用の特徴はその伝達に距離や時間が影響しないため、刺激対象に拘らず何物も媒介されない、実験刺激の信号が減少・緩和されない、瞬時に起こるということである。これらの遠隔作用的の特徴によって受け手対象がどんなに遠く離れていても、どんな媒介物もなしにその対象シグナルの力は弱まらず、瞬時に起こるということである。このように時空を越えて伝わる遠隔作用には、現代社会の抱えている様々な問題に対して応用できる可能性がある。例えば、多くの超越瞑想における研究では、集団で瞑想することにより、その町の犯罪率が減少したという事例等である。ホスピスにおいて集団的

「祈り」と共にあるホスピスの風景

にヒーラーが死に至る患者のために「祈る」事で、病気が緩和する事は良く知られている。それはまさしく患者に対するスピリチュアル・ヒーリングであり、このような作業が病院や施設で行われる事が歓迎される。ただし、個人病棟以外の場では遠隔ヒーリングで行うことが重要である。患者の中には必ずしもそのような「祈り」を望まず、拒否する他の患者の存在があるからである。このような作業が宗教と連携していることで生ずる様々な軋轢も、日本社会における問題点である。新興宗教のヒーラーが出入りする病室において、何か異様な現象が行われているとすれば、個室であっても大勢の患者を抱える病院側に迷惑がかかる可能性がある。今日、宗教とは無関係なスピリチュアル・ケアを主張す立場がある。そこでは、祈りではなく、患者の生涯の出来事を深く聞きながら、自己実現に向かって歩むことができるように仕向けて行くカウンセラーの役割がある。特定の宗教とは関係のないスピリチュアル・セラピストの存在がホスピスにおいて今後増えて行くに違いない。しかし、ホスピスや緩和病棟には「祈り」の光景が最も相応しい。

なお、アメリカの最新の研究では大学病院の外科医と組んで心臓の外科手術後のヒーリングによる痛みの緩和、早い回復、その他のその個人がもっている様々な不安の解消を行っている。又、脳波と心電図の間の相関を人間同士の相関を調べ、これは臓器移植を受けた人がドナーの性格を受けやすいという現実があるためである。その他、さまざまな研究が行われており、将来、科学的研究がこのような霊的世界の現象とどのような関係にあるのかを具体的に解明するところまで進んで行くかもしれない。死後の世界までも含むこの種の研究がニューサイエンスの醍醐味となる事が予想される。

おわりに：

ユング流の言い方をすればスピリチュアリティとは「意識が変容し高次の状態になるプロセス」であり、「無意識の深いレベルから、活性化された力を呼び覚まし、意識のレベルに押し上げること」である。それは我々人間の内なる本性を呼び覚まし、日常的理性とは異なる状況で向き合う自我は、諸宗教の枠組みを越えて、数知れない多くの手段を用いて古来から継続され維持されてきた儀式によって実践される。聖職者は高次の意識である瞑想の境地に到達する修行が要求される。それはこの世にあらざるオカルトの世界へ誘うことでもある。祈りはヒーラーの修行の度合いによって効果があると言われるが、しかし、現代社会においてカルト宗教集団が集団的に瞑想状態で酩酊するかの如き状況に陥り、恍惚のうちに犯罪者となる危険を常に内包している事は注意を要する。

21世紀になって様々な社会的危機現象が起こっている。世界はグローバル化に向けて歩み出そうとしている矢先に、世界中に散らばる夫々の民族は民族固有の価値観に沿って世界が動くことを希求するようになり、一国利益誘導の路線に無意識的にその一步を踏み出している。世界が人道的精神のもとに自由な生活が保障される事をよしとする価値観を義とする限り、必ずこの価値観を阻止

する民族正義派の跳梁を招く。これら二つの精神の統合を成就するために、人類の英知がどこまで無意識の世界を探求出来るのか、その成就を強く祈りつつ、来るべき時代の平和が永続することを期待する。

参考文献：

- 湯浅泰雄, 青木豊, 田中朱実 (監修), 「科学とスピリチュアリティの時代 - 身体・気・スピリチュアリティ - 」, 星雲社, 2005。
- 湯浅泰雄, 竹本忠雄 (共編), 「ニューサイエンスと気の科学」, 青土社, 1993。
- 湯浅泰雄 (監修), 「スピリチュアリティの現在」, 人文書院, 2003。
- 田崎美弥子, 松田正己, 中根充文, スピリチュアリティに関する質的調査の試み - 健康およびQOLの概念のからみの中で, 「日本医事新報」, 4036号, 2001
- Ellenberger, H. F., The discovery of the unconscious - The history and evaluation of dynamic psychiatry - , Basic Book Inc. 1970 (エレンベルガー「無意識の発見」上, 下, 木村敏, 中井久夫 (監訳), 弘文堂, 1980)
- 湯浅泰雄, 「共時性の宇宙観」, 人文書院, 1995
- Blair, L., Rhysms of vision, Croom Helm Ltd., 1975 (ローレンス・ブレアー, 菅靖彦訳, 超__自然学, 宇宙と意識のリズム, 平河出版社, 1983)
- バード, R.C., C C U (冠状動脈疾患集中治療室)における人のための祈りによる明確な治療効果, 「Southern Medical Journal」, 81(7), 1988
- ダーク, E., 遠隔ヒーリング研究の評価 - 総説, 「Alternative Therapies in Health & Medicine」, 3(6), 1997
- ヘーリゲン, J. S., D. W. オームジョンソン, 超越瞑想プログラムの集団実践による首都ワシントンDCにおける暴力的犯罪の防止効果 - 国家証明プロジェクトの結果, 「Social Indicators Research」, 47, 1999.
- Progoff, I., 『Jung, Synchronicity and human destiny: Noncausal dimensions of human experience』, Julian Press, Inc., 1973 (イラ・プロゴフ, 河合隼雄, 河合幹雄, (共訳), ユング心理学選書12, ユングと共時性, 創元社, 1987)
- Eliade, M., Birth and rebirth, Harper & Brothers, 1958 (ミルチャー・エリアーデ, 堀一郎訳, 生と再生, 東京大学出版会, 1971)
- Hegel, G. W. F., The phenomenology of mind, Harper & Row, 1948 (ヘーゲル, 金子武蔵訳, 精神の現象学, 上, 下, 岩波書店, 1978)
- James, W., Varieties of religious experiance, Random House, 1963 (ウィリアム・ジェームス, 榎田啓三郎訳, 宗教的経験の諸相, 上, 下, 岩波書店, 1962)
- Jung, C. G., Pauli, W., Synchronicity: An acausal connecting principle. The interpretation of nature and the psyche, Pantheron Books, 1955 (ユング, パウリ, 河合隼雄, 村上陽一郎 (共訳), 「自然現象と心の構造」, 海鳴社, 1976)
- Otto, R., The idea of the holy, Oxford University Press, 4958 (ルドルフ・オットー, 山谷省吾訳, 「聖なるもの」, 岩波書店, 1968)
- Dossey, L., Healing words: The power of prayer and the practice of medicine. Harper, 1993. (ラリー・ドゥシー, 森内薫訳, 癒しのことば - よみがえる「祈り」の力, 春秋社, 1995)
- 斉藤 環, 「心理学化する社会 - なぜ, ト라우マと癒しが求められるのか - 」, P H P, 2003。
- Dourley, J. P., C. G. Jung and Paul Tillich - psyche as sacrament - , Inner City Book, 1981 (ドゥアリュイ, 久保田圭吾, 河東 仁共訳, ユングとティリッヒ, 大明堂, 1985)
- 丸山久美子, 臨床社会心理学 - 人間関係の病理 - , プレーン出版, 2005
- 丸山久美子, Q O L D 評価測定尺度の基礎的研究 (VII) - 現代青年の実存的痛みに関する認知構造, 聖学院大学論叢, 第18巻, 第2号, 93 - 102, 2005
- 丸山久美子, 「伝道の課題としての死」をめぐる若干の考察, 聖学院大学論叢, 第17巻, 第1号, 115 -

124, 2004

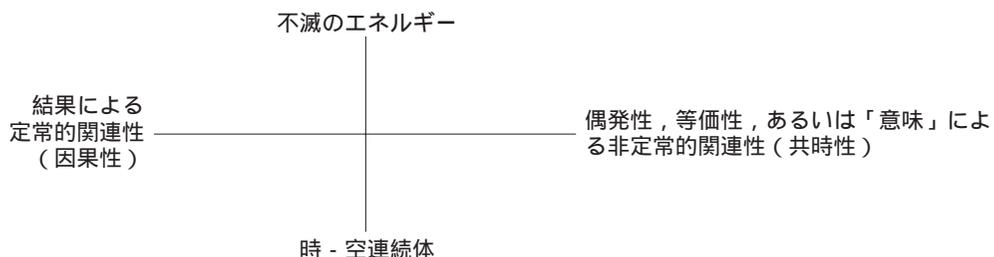
- 丸山久美子, Q O L D 評価測定尺度の基礎的研究 (IV) - Spiritual Pain の測定可能性 - , 聖学院大学論叢, 第14巻, 第1号, 101 - 118, 2001
- 丸山久美子, ヘンドリック・ビベラー, 日独大学生の「生と死」への態度に関する比較研究, 聖学院大学論叢, 第8巻第2号, 191 - 222, 1996
- 丸山久美子, ターミナル・ケアにおける「癒し」の問題, 「催眠と科学」第10号, 17 - 20, 1995
- 丸山久美子, 20世紀末現代社会の光と影, 「聖学院大学論叢」第7巻第2号, 145 - 158, 1995
- 丸山久美子, 生と死のエトス - 現代青年の死生観と社会不安 - , 「聖学院大学論叢」第1巻, 1988
- 丸山久美子, 心理学的測定における非線形問題 - その根本概念と因子分析法・多事元尺度解析法に関連して - , 「心理学研究」, 第40巻, 第4号, 212 - 220, 第5号, 274 - 290, 1969
- 木戸真美, 遠隔ヒーリング効果の測定, 「国際生命情報科学会誌」, 第20巻, 第2号, 2002
- 山中康裕, 臨床ユング心理学入門, P H P 親書, 1996
- 森田正馬, 赤面恐怖の治し方, 白揚社, 1953
- 長谷川和夫, 森田療法入門, ゴマ書房, 1993
- 岡野守也, 唯識の心理学, 青土社, 1990
- 渡辺恒夫, 中村雅彦, オカルト流行の深層社会心理, ナカニシヤ出版, 1998
- 近藤勝彦, 癒しと信仰, 教文館, 1996
- カール・ベッカー, 死の体験 - 臨死体験の探求 - , 法蔵館, 1992
- Peterson, E.H., Workings the angels - Theshape of pastral integrity - , William B. Eerdmans Pub. Co., 1997 (E・H・ピーターソン, 越川弘英訳, 牧会者の神学 - 祈り・聖所理解・霊的導き - , 日本基督教団出版局, 1997)
- Epstain, G., Healing into immortality - A new spiritual medicine of healing stories and imagery, Bantam Books, 1994 (G・エプスタイン, 高橋照子訳, スピリチュアル・メディシン - 十戒とイメージワークによる癒し - , 春秋社, 1996)
- Weil, A., Spontaneous healing, Alfred A. Knoph, Inc., 1995 (アンドル・ワイル, 上野圭一訳, 癒す心, 治る力 - 自発的治療とは何か - , 角川書店, 1995)
- Jung, C. G., Psychologische Typen, 9., revid. Auflage, Rascher Verlag, Zürich u. Suttgart, 1960 (C・G・ユング, 高橋義孝, 森川俊夫, 佐藤正樹共訳, ユング・コレクション2, 心理学的類型, I, II, 人文書院, 1987)
- Jung, C. G., Psychologie und Alchemie, Psychologische Abhandlungen V, Zürich, 1994 (C・G. ユング, 池田紘一, 鎌田道生共訳, 心理学と錬金術 I, II, 人文書院, 1976) 笠原敏雄, 超心理学ハンドブック, ブレーン出版, 1989

注

- (1) カール・グスタフ・ユング (Carl Gustav Jung) はフロイトの精神分析学からの単なる継続者ではない。ユングの分析心理学をフロイト派の精神分析学のスケールで測ってはならない。両者はそれぞれ、その持ち前の哲学の言葉で理解されるべきものである。ユングとフロイトの根本的・哲学的相違は以下である。1) その哲学的基盤が異なっている。ユングもフロイトも共にロマン主義の世界の唯中で育っているとはいえ、精神分析は実証主義, 科学万能主義, ダーウィン主義の相続人であり, 分析心理学はこの種の先達の知的遺産の相続を拒否し, ロマン派精神医学と自然哲学がその基礎とした基本的な姿勢にどのような改変を加えることなく, そのまま受入れる。2) フロイトが, 人間心性のうち哲学者が直感的に知悉していた部分を探求するに対して, ユングは人間の宗教と心理学の中間領域に客観的に接近し, この領域を科学に併合させることが出来たと主張している。ユングは1875年にスイスの寒村に生まれ, 1961年にチューリッヒ湖畔のキュスナハトで逝去した。ユングは全生涯をスイスで過ごしている。ユングが生まれたとき, フロイトは19才, ジャネは16才, アードラーは5才である。つまり, ユングは新力動精神医学を開拓した偉大な先達の中のだれよりも若く, 20世紀後半まで生存した。生

涯の終わり頃、ユングは「ギュスナハトの老賢者」という伝説的な人物を自らに具現し、世界のあらゆる所から多くの人々がユングのもとへ学びに来た。日本ではユングの弟子として知られているのは著名な分析心理学者・河合隼雄である。

- (2) 共時性の概念はユングの最後の最も理解困難な概念であり、誤解を受けやすく、オカルティズムとの関連から解釈される場合もある。実際に、ユング自身も心霊研究や超心理学に興味を持っていた。アメリカの超心理学者ジューク大学の J.B. ラインの ESP (Extra Sensory Perception) 実験研究を例に出して共時性の概念を説明しようとしたり、中国の易学、西洋の占星術、錬金術の実験を行っている。このようなユングの研究傾向から彼を最もよく理解し、ユング心理学入門を著した A. ストーはその冒頭で「共時性に関する彼の著作は、混乱していてほとんど実際の価値がないと私には思えることを、ここに告白しなければならない」と書いている。しかし、1952年、この概念は心理学者ユングと物理学者パウリとの共著「自然の解明と精神」で画期的な発展を見ることになる。この書はユングの「非因果的関連の原理としての共時性」、パウリの「ケプラーにおける自然科学理論の形成に関する元型的理念の影響」という二つの論文からなっている。日本では「自然現象と心の構造」と題して河合隼雄と村上陽一郎が1976年に共訳している。ここに、共時性とは二つの異なる心的状態が同時に起こることである。客観的事実と主観的体験が、因果的に関係がなく、同時に起こる事が非因果的関連の共時的現象である。神秘主義的詩人・作家のスウェーデンボリの例を挙げて説明すると次のようになる。ストックホルムで火事が起こった時、何の因果的関連もなく、彼はその幻影をロンドンで見た。空間的に全く離れているにもかかわらず、客観的に考えようとするれば、彼の心がストックホルムの火事を起こしたのか、あるいは、ストックホルムの火事がなにか思いも寄らない方法で、彼の心、または頭にこれと対応するイメージを活性化させたことになる。いずれも、安直には答えられない媒介物、隠された力が両者の間を媒介したことになる。多くの人はこの現象を単なる偶然の一致であるとたがづけてしまうだろう。
- (3) オカルト・ブームは20世紀後半に若者たちの間に流行した社会現象である。オカルト・ブームはその社会が心理的に不安定でそれらの不安を回避するために若者たちが目に見える信仰対象を求め信心しようとすることによる。韓国人牧師の文鮮明による世界統一協会や麻原オウム真理教教祖に共鳴した優秀な若者たちがそのブームをより強固なものにした。合理的事象に対する関心が飽和状態になり、その結果科学を越えた事象に対する好奇心が喚起されるようになった。しかも、先端医学的進歩から取り残されていく末期患者の精神世界は人間の生と死になどの生命に対する究極的な関心を呼び覚ました。生命科学の進歩は人工授精や臓器移植、安楽死、尊厳死、臨死体験、体外離脱などの話題が活発になると若者の精神世界に対する興味関心が一層強くなり、オカルト・ブームという社会病理現象を生み出した。
- (4) 物理学者ニールス・ボーア (Niels Bohr) は非連続体 (粒子) と連続体 (波動) との間を媒介する術語として「対応性 (correspondence)」という言葉を用いて、後にそれを対応性の理論として体系づけた。これは中世の自然哲学者たちが発案した対応性 (correspondentia) の理論や事物の共感性という古典的な考えと同じである。ヒポクラテスは「そこに一つの共通の流れ、共通の息吹きがあって、すべての事物が共感しあっている。その有機体全体とその部分の各々が共同して、同一の目的のために働いている。その偉大な原理が末端の部分にまで延長しており、そしてその末端の部分からそれは偉大な原理へ、一つの自然へ、存在と無へ向かって帰って行く(“De alimento”, trans. by J.Precupe in Hippocra-



「祈り」と共にあるホスピスの風景

tes on Diet and Hygiene, London, 1952)」。ユングはこれらの物理学者からえた共時性の概念を次のように図示している。

ユングと共に難解な非因果律を追求した物理学者パウリの論考は近代初期の天文学者ヨハネス・ケプラーの天文学や運動力学の底流を構成する概念枠組み、あるいはその深層に横たわり、それを支える無意識の構造を解明しようとするものである。パウリは現代物理学のタブーを破って彼の理論を構築し、ユングも現代心理学のタブーを破って、近代科学の枠組みを越え、合理的思考からはずれてオカルトの世界へと船出しているのであるが、しかしこれはフロイトが「我々の意識は氷山の一角に過ぎない。その底流を支えているのは無意識の世界である」と言ったように、現代科学における合理的概念は単に現実の世界のほんの一部であり、大部分は非合理的概念によって支えられているのである。心理的現象を測定する時の最大の問題はそこにある。即ち、心理的現象は非線形現象であるにも拘らず、線形的手法によってしか測定できない、あるいは解釈できない事に対するジレンマである。これまでの時-空間概念の視点を徹底的に変えて、非線形空間における心理現象（非日常的な意識体験の研究）を捉えて行くことの出来る偉大な英知を望む所以である（丸山、1969）。

- (5) 青年の社会的不安を調査した結果によれば、死後の世界はあると回答した人がないと回答した人よりも高い比率を示している。この問題は宗教と深い関係があることは理解できるが、合理的世界観をもつ医学生の間にも、死後の世界が存在すると回答した比率が高いことには驚かされた。

死後の世界の存在の有無

死後の世界	大学生		医学生	看護学生	学僧	神学生
	男子	女子				
信じる	41.5	39.2	37.4	40.0	72.1	71.7
わからない	38.9	37.5	32.4	44.7	23.3	15.2
信じない	19.2	23.3	30.4	15.2	4.7	13.0

(1987 - 1988 年度調査)

- (6) 日本において初めて科学的に超常現象を研究したのは当時、東京帝国大学文学部心理学科の助教授であった福来友吉である。彼は元来催眠の研究者であったが、催眠状態にある被験者に透視能力があるらしい事に気づいたことから、透視の研究に入り、未現像の乾板に撮影された文字の透視が超能力者に可能かどうかを検討している中で、能力者の念力によると思われる「カブリ」が乾板全体に生じたことから、念写という可能性を世界に先駆けて考えるに至った。その後、福来友吉は京都帝国大学の医学部精神医学科教授今村新吉と共同研究し、この研究の批判者であった東大総長の山川健次郎を巻き込みながら透視と念写の研究の実験的研究を行った。しかし、肝心の実験が批判者側の手違いで成立しなかったり、有力な能力者が相次いで死亡するなど窮地に追い込まれ、「透視と念写」を上梓して間もなく文部大臣より2年間の休職を命じられ、退職を余儀なくされた。しかし、彼は1952年に仙台で死去するまで、超常現象の研究を続けた。

福来友吉、「透視と念写」、1913、宝文館

- (7) 慈恵会医科大学精神科初代教授森田正馬が考案した精神療法の一技法。絶対禱、作業、日常生活などの体験を通して、神経症による不安を克服できるように訓練させる治療であり、その中心的考えを「あるがまま」と呼ぶ。

森田理論は「あるがまま」、「恐怖突入」、「物事本位」と言った言葉を用いて治療するので、一般的に理解しやすく自分たちで相互に助け合うセルフ・グループも作りやすく、その中でも「生活の発見会」は全国規模で支部を作り強力に活動している。